



堂々と出てきた「被拘」「弁護団」「傍聴団」を全員の拍手で迎える動労千葉動員者。
——オ6回公判を終えて、千葉地裁正門(82・4・22)

「6.12事件」デッチあげ公判・「新たな6名への不当弾圧」を許さない 怒りの連続闘争を貫徹!

権力・本部革マル反動分子の卑劣極まりない 攻撃に、二、三〇〇組合員は総決起しよう!

4月22日、13時、千葉地裁正門に、鉄輪旗・横断幕・怒りをこめたシユフ
レヒコールがとどろく。その中でオ6回「6.12事件」公判闘争が聞いぬかれ
た。今回の公判は、検察側証人・動労「本部」仙台地本佐藤次男(当時地本書記
長)、他一名の検事による主尋問がおこなわれた。

同時にこの日、わが動労千葉の4支部6名の仲間にかけられてきている、
動労「本部」革マル反動分子と国家権力(千葉県警)の完全に一体となった、新たな
許すまじき弾圧攻撃に、緊急動員にもかかわりえず、全支部より二一〇名の組
合員がかけつけ、怒りの「反弾圧、総決起集会」をかちとり、断固たる決意
と怒りを県警本部にむけて叩きつけ、市内デモをかちとった。(詳報次号)

ますますソップもきこらざる、千葉の本部派

午前11時、千葉運転区講習室を埋め尽
した組合員は、決起集会の後、千葉地裁
正門前に向い、全員ゼッケン・ハチマキ
横断幕・鉄輪旗をおし立てて地裁正門前
を制圧した。毎回のことながら、「本部」革
マル反動分子は地元「千葉地本」組合員に動
員指令を出してもソップをむかひ出さな
ないことにあせって、例のごとく革マル
とその追従者の関東動員をかき集め、千
葉県警の手厚い警護に頼り切ってなんと
か顔を出してはいるものの、完全にシラ
ケ切っているのがよくわかる。彼らの「動
員」とは、権力側の証人を恫喝・尻押しして、権
力の前に差出し、闘う労働

者を権力に売り渡すよう
監視し圧力をかけるため
の「動員」である。公判が回
を重ねるごとに地元「千葉
地本」組合員はどんどん数が
減り、ほんの数人來ている者も、
わが動労千葉の怒りと決意の
前に、正視できず顔も伏せ、後の
方でオロオロしているのも無理
からぬことである。

法廷の中でも、検事は「検事
側証人」として呼び出した今回の
「証人」なるものが、純粋革マル分
子「嶋田誠や斉藤吉司と違つて、
デッチ上げの事実を自己暴露

してしまいはしなかつた、終始ソワソワとあせって、
証人が「証言もしない事からをデッチあげに向けて
強引に誘導尋問するというオンマツサを暴露
した。

「集団暴行」なるデッチあげの相次、崩壊!

こ息な検事の誘導にもかかわりえず、今回の「証言」
で、革マル嶋田らの完全なデッチあげ工作が暴露された。
そのオ1は、革マル嶋田斉藤らが、権力と綿密に口
裏を合わせて、ここぞと「暴行」をデッチあげた
ために、これまでの公判で、「ゆけば何かされる」「斉藤、
「恐怖を感じた」「嶋田」↓つまり、「だから暴力があつ
た」という動機づくりにけんめいになったのであ
るが、今回の証言・証人は、お互いの組合員獲得
のため、ごく一般的な「押し問答程度であった」と
明確に証言したのである。

「検察側証人」のこの証言は、権力と革マル分
子以外に、「暴行」などとデッチ上げる者は誰一人とし
ていない事をさし示している。

「検事、あせりにあせって「誘導尋問」

このような決定的な「証言」であせりにあせってし
まった検事は、全く不法不道な誘導尋問によ
る「証言」を強要しようとして、何度も抗議され注意
され、そのたびに「デッチあげ」性を自己暴露してゆか
ざるを得なかった。例えば、証人が「翌日になつて足に
アザがあった。どうしてついたかわからない」と言たのを
とらえて、検事は「証人が言った足の5cmのアザは、何か
例えば靴のように固い物でつけられたのではないのですか
?」と、何か何でも「暴行」にしようとする強引な誘導して、
抗議されるという具合である。デッチ上げを粉碎しよう、

日刊 動労千葉

82・4・26
No.1029

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市曙町二一八(動力車会館)
(鉄電)二九三五・六・八(夜)三三三三・七二〇七